

# 丹後の横穴式石室

—丹後町大成古墳群の再評価を中心に—

森 正

## 1 はじめに

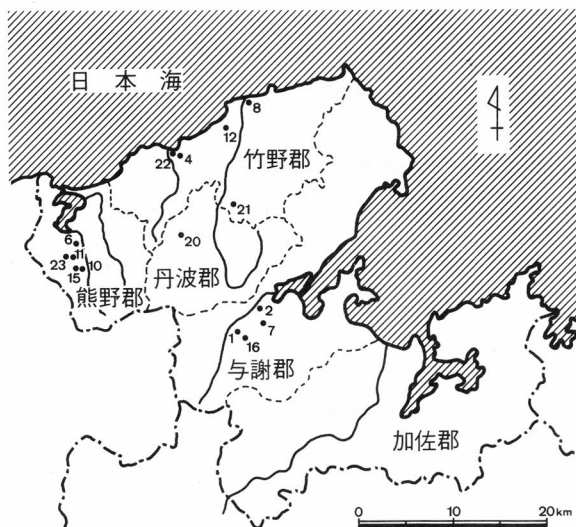
古代行政区画による旧丹後国は、713年(和銅6年)に分置されるまでは、丹波国に含まれていた。しかし、丹後・丹波両国の境は、大江山系によって分かたれているため、旧丹後国にはほぼ相当する範囲は、一定の地域的領域を持つものとして扱うことができる。今回対象とする古墳時代後期においても、やはり文化的にも別の地域として考えることができる。

この丹後地域においては、近年の調査によって新たな成果が増加しており、横穴式石室についても例外でない。調査事例の増えた今、その構造的な変遷をある程度明らかにすることが可能であるものと考えられる。今回は、地域内部での横穴式石室の変遷をあとづけ、そこに見られる画期について考えてみたい。その際、特に畿内系横穴式石室の導入にかかわり、重要な位置を占めると思われる丹後町大成古墳群の再検討を行い、この位置づけをまず行う。

## 2 丹後町大成古墳群

大成古墳群は、丹後半島のほぼ中央を南北に貫流する竹野川河口部の右岸、日本海に面する台地上に位置する。古墳群は13基で構成されていたとされ、このうち昭和42年に7・8・9号墳の3基の発掘調査が行われている。墳形はいずれも円墳であり、直径16m程度の規模を有する。各石室の残存状況は比較的良好であり、7号墳が右片袖型、8号墳が両袖型、9号墳が無袖型と、それぞれ異なった平面プランを採る。以下に7・8号墳の石室構造を概観し、出土須恵器の検討をもとに築造時期についても考える。

**大成7号墳** 玄室平面形は右片袖型であり、袖部を構成する石材は、縦長の石材を立てて用い、羨道天井石との間には羨道側壁最上段の石材を載せている。玄室断面形は、基底石材から内傾ぎみに持ち送るため、台形を呈している。石材は、玄武岩を用いており、基底石を縦位に、2段目からは横積みによって構築する。各壁体は丁寧に積まれており、整った壁面をなす。羨道は、開口部に向かい緩やかに開いてゆく。全長10.2m・玄室長4.4



第1図 主要横穴式石室分布図  
(番号は表中番号に一致)

m・同幅1.9m・高さ1.9m・羨道長5.8m・羨道幅は玄門部で1.3m、羨門部では1.8mを測る。玄室比は2.32であり、細長い平面プランを呈する。

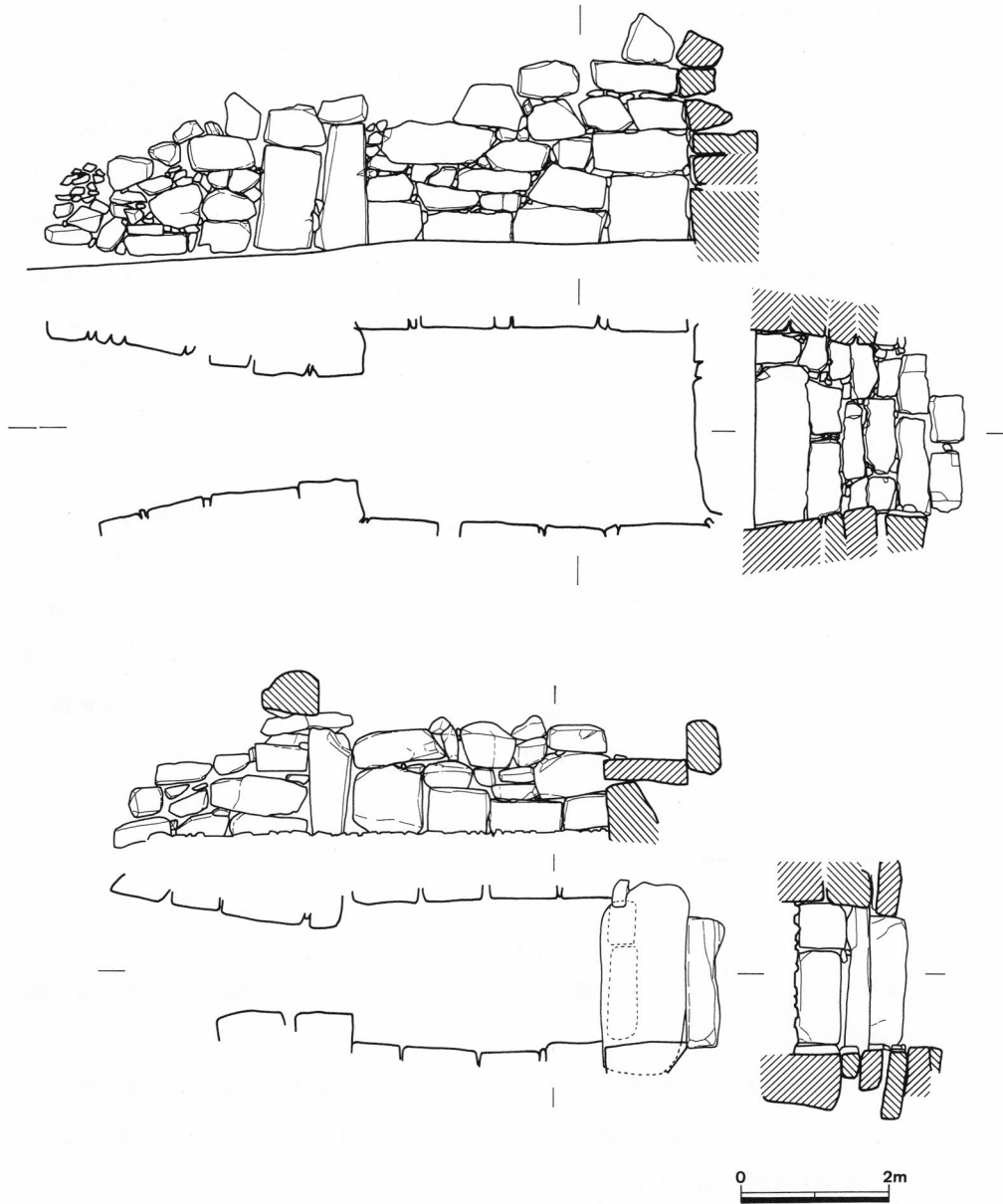
大成8号墳 玄室平面形は、両袖型であり、袖部は左右ともに縦長の石材を立てて用いて構成している。玄室横断面は、基底石より内傾ぎみに持ち送るため台形を呈する。これに対して奥壁では、下段より3段目までは垂直に積み、4段目以降は壁

面石材の裏側に小石材をかませるなどして意識的に内傾させている。さらに、ちょうどこの奥壁3段目と4段目の境の高さで側壁石積みの目地が通り、さらにこのラインは、玄門立柱石の上端レベルとも揃っている。このライン(目地)は、石室構築作業上の一つの段階を表すものであり、玄室部分と玄門部構築に強い計画性と企画性を読みとれる。これに対して、羨道部の石積みは立柱石から2石目までは、やや大型の石材を使用する以外は、小形石材を乱雑に積み上げており、玄室構築と平行して作業が行われたといえない状況である。

当古墳の築造時期については、出土須恵器のなかで蓋杯に注目すれば、TK43型式のなかでも古く位置付けられるものがある。<sup>2</sup>ほぼ同様な傾向を示す例としては、野田川町高浪1号墳出土須恵器のなかに見ることができる。大成7号墳の須恵器についても、ほぼ同様である。これに対して、高山1・4・7号墳、湯舟坂1号墳出土須恵器のなかで最古相を示すものは、杯蓋肩部の稜が消失し、天井部から口縁部までなだらかに至っているなど、新しい要素として捉えることができる。

大成7・8号墳については、羨道部のプランにやや異質な要素が認められるものの、いわゆる畿内系の横穴式石室と考えることができる。同時期である高浪1号墳では、奥壁部に、石棚状の施設を設けるが、その他の構造は大成8号墳に類似するものである。

以上の点をふまえて、次に、丹後地域の横穴式石室の時期ごとの変遷と、画期についてみてみる。



第2図 横穴式石室実測図(上：大成8号墳，下：高浪1号墳)  
(各報告書より再トレース)

### 3 丹後地域横穴式石室の諸段階

発掘調査が行われたもののなかで、出土遺物によって築造時期が確認できるものを中心に作成したものが第1表である。

I期は、TK10型式以前の段階であるが当地域においては今のところMT15型式以前の

第1表 丹後地域主要横穴式石室編年表

		与 謝	竹 野 ・ 中	熊 野
I 期	MT15		離山古墳(4)	崩谷3号墳(5)
	TK10	入谷西A1号墳(1) 霧ヶ鼻6号墳(2) 霧ヶ鼻7号墳(3)		陵神社12号墳(6)
II 期	a	高浪1号墳(7)	大成8号墳(8) 大成7号墳(9)	(平野古墳)(10) 崩谷1号墳(11)
	b		高山1号墳(12) 高山4号墳(13) 高山7号墳(14)	湯舟坂2号墳(15)
III 期	TK209	河ノ辺1号墳(16)	高山3号墳(17) 高山12号墳(18) 大成9号墳(19) 桃谷古墳(20) 新ヶ尾東10号墳(23) 岡1号墳(22)	アバタ1号墳(23) アバタ2号墳(24)

石室は知られていないため、両型式の時期を含める。II期は、TK43型式の段階であるが、先の大成古墳群出土土器の検討結果からもa・bの2小期に分けて考えることができる。III期はTK209型式、IV期はTK217型式の段階にそれぞれ相当する。ただ、今のところ丹後地域では、IV期になって新たに築造された横穴式石室は確認されていない。

I期 丹後地域における横穴式石室の導入期である。竹野川流域においては現在のところ確認されていないが、その他の流域においては、数例ずつ近年の調査によって事例が増加している。

この時期の石室の構造上の特徴としては、久美浜町崩谷3号墳を除き、横口部・前庭側壁を有したり、玄門部に段構造を持つといった、いわゆる堅穴系横口式石室の影響を受けたものである点を上げる。ただし、これらの石室構造を細かく見れば、林氏が行っているように幾つかの類型に分類することも可能である<sup>3</sup>。このことは、石室導入の系譜が、かなり複雑なものであったと推定できる。

また、I期の横穴式石室は、丘陵上に展開する直葬系埋葬施設を内部主体とする古墳群内に成立しており、II期に連続する横穴式石室墳を群内に形成しない。このことは、II期の横穴式石室と石室構造上、非連続性を示すこともふまえて、注意すべき点であり、墓域の移動、工人集団の変化といった現象をみてとれる。

ただし、久美浜町崩谷古墳群においては、他とは異なった状況を示す。ここでは、丘陵稜線上に上方から木棺墓である2号墳と、横穴式石室を持つ1・3号墳が築造されている。石室では3号墳が古く、I期に属する。長方形の玄室で右片袖形の平面プランを呈し、玄室比は2.28である。袖部は、石材を横積みして構築しており、最下段から3段が残存している。大和・河内等畿内中核地域においては既に成立している畿内系横穴式石室とみてよい。1号墳は、3号墳に続いて築造されるが、II期に属する。石室構造に基本的な変化はなく、長方形の玄室で右片袖の平面プランを呈する。玄室比は2.59であり、3号墳よりやや細長くなり、石材もやや大型のものを使用している。このように、I期からII期へ連続して横穴式石室が築造されている点や、石室構造等に異なる背景を考えねばならない。

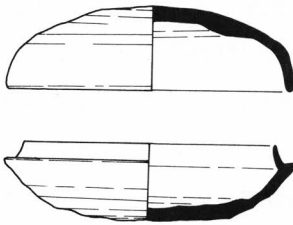
II期 この段階では、大きく墓域が変化するとともに、各地域に、畿内系横穴式石室が成立する。ただ、大成8号墳・高浪1号墳の両古墳は、羨道部が開口部に向かって大きく開く平面プランであり、同時期の畿内の横穴式石室にはない特徴も備えている。畿内の影響を受けながらも、在地の地域色の表れた結果と見るべきであろう。あるいは、I期の入谷西A1号墳や離山古墳等において見られる、前庭側壁が開く構造との関連を想定することも可能であろう。高山古墳群、大成古墳群をはじめ、III期に継続して横穴式石室を築くものの大半は、この段階で群形成を開始する。

今回は、このII期を出土須恵器の検討から2小期に分けたが、石室構造上からみてもこれに対応する変化を読みとれる。IIa期の大成7・8号墳、高浪1号墳では、比較的大形で大きさの揃った石材を積上げ、また、前述のように玄門立柱石の高さで、一度各壁面のレベルを正確に揃える等、一定共通した構築技術のもとに築造されている。これに対してIIb期の石室では、使用石材の大きさの不均等にもからみ、粗雑な構造をとり、各石室ごとにかかりの構造上の異なりを見せる。技術的にみれば、明らかに後退したものと考えざるを得ない。しかし、この段階では、湯舟坂2号墳に見られるように、新たに巨石使用の石室も成立する。このことは、新たな構築技術指導のもとに成し遂げられると考えるが、巨石使用の大形横穴式石室と、群内に存在する中小規模の横穴式石室は構築技術上、対象的なあり方を示す。

III期 各地で無袖形の横穴式石室が、出現する段階である。なかでも、大成9号墳・高山3号墳は、石室全長が10mを越える規模を有している。この両墳は、それぞれ十数基から構成される古墳群のなかで、その最終段階に築造されるといった共通点をもつ。

#### 4 おわりに

今回は、ここ数年で急速に調査資料の増加があった、丹後地域の横穴式石室を取り上げ、



第3図 高浪1号墳出土須恵器  
(S=1/4)

主にその構造の変化と画期についてまとめてみた。

構造上の画期としては、大きく4つの段階に分けて考えることが出来たが、今一度まとめておくと、第1の画期は、当然横穴式石室の採用である。6世紀前半のなかでも早い時期にあたる。また、採用にあたってはやはり多方面からの系譜・影響を考えねばならず、今後さらに検討すべき課題である。

第2の画期は、畿内系横穴式石室の定着である。6世紀の後半にあたる。

第3の画期は、巨石使用の横穴式石室の成立と畿内系横穴式石室の変容である。前段階で成立した畿内系石室が、すぐに粗雑な方向への変容を遂げていく。

第4の画期は、無袖形横穴式石室の成立であり、6世紀末頃にあたる。

石室構造上の画期として見た場合、I期からII期への変化が最も大きな画期であると考えられる。また、先にも触れたように、II期の開始とともに、墓域の移動も認められる。石室構築にあたる工人組織、造墓集団を含め、大きく地域内集団の再編が行われたことを想定できる。

丹後地域においては、6世紀代の大型首長墓は、後半期に位置付けられる前方後円墳の大宮町新戸古墳(全長35m)以外に見い出せない<sup>4</sup>。このため、おのずと中小規模の横穴式石室を中心にして、地域内での動向を探ることとなったが、石室構造から見た諸画期のなかでも今回は特に、第2の画期に大きな意義を認めたい。畿内系横穴式石室の成立・定着といった現象は、畿内周辺地域それぞれで、一定の時間的ズレを持ちながら進行していくと考えられる。特に丹後地域において第2の画期が遅れる理由については、直ちには明らかにし難いが、隣接する若狭地域においては、TK10型式の段階で、畿内系の横穴式石室である丸山塚古墳が成立する点が指摘されている<sup>5</sup>。このように6世紀段階での大型首長墓が存在する地域では、いち早く畿内系横穴式石室の導入が行われており、丹後地域での導入がこれより遅れることの要因は、やはり6世紀前半段階での大型首長墓の欠如と密接からむ現象と見ることもできる。

なお、最後になりましたが、本稿をなすにあたり、杉原和雄・磯野浩光・森下衛・細川康晴・石崎善久の各氏から有益な御教示を得ました。記して謝意を表します。

(もり・ただし=当センター)

1 横穴式石室の平面企画の段階的発展過程を復元した細川氏の試みがある。細川康晴「横穴式石室の平面企画—丹後地域の場合—」(『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ) 1988

- 2 京都府立丹後郷土資料館細川康晴氏の御配慮により出土遺物を実見する機会を得た。
- 3 林日佐子「丹後・丹波地域における初現期の横穴式石室」(『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ) 1988
- 4 杉原和雄ほか「裏陰遺跡発掘調査概要」(『大宮町文化財調査報告第1集』大宮町教育委員会) 1979
- 5 入江敏文「若狭地方における首長墓の動態—主体部・副葬品の分析を通して—」(『福井県史』資料編13 考古—本文編— 福井県) 1986

横穴式石室編年表中の文献一覧(文献番号は、表中の番号による)

- (1)佐藤晃一「入谷西A1号墳発掘調査概要」(『加悦町文化財調査概要第2集』加悦町教育委員会) 1983
- (2)「霧ヶ鼻古墳群第2次現地説明会資料」(宮津市教育委員会) 1990. 7.28
- (3)「霧ヶ鼻古墳群第2次現地説明会資料」(宮津市教育委員会) 1990. 7.28
- (4)「離山古墳現地説明会資料」(網野町教育委員会) 1990. 9. 1
- (5)森下衛「国営農地開発事業関係遺跡昭和63年度発掘調査概要〔1〕崩谷古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報1989』京都府教育委員会) 1989
- (6)「陵神社12号墳現地説明会資料」(久美浜町教育委員会) 1990. 8.25
- (7)久保哲正・波多野徹「高浪古墳発掘調査概要」(『京都府野田川町文化財調査報告第1集』野田川町教育委員会) 1985
- (8)高橋美久二ほか「大成古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1968』京都府教育委員会) 1968
- (9)高橋美久二ほか「大成古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1968』京都府教育委員会) 1968
- (10)山内陽詳「畑大塚古墳群」(『久美浜町文化財調査報告第10集』久美浜町教育委員会) 1988
- (11)岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔6〕崩谷古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報1988』京都府教育委員会) 1988
- (12)岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔1〕高山古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報1988』京都府教育委員会) 1988
- (13)増田孝彦・森正ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(1)高山古墳群・高山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- (14)増田孝彦・森正ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(1)高山古墳群・高山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- (15)奥村清一郎・新納泉ほか「湯舟坂2号墳」(『京都府久美浜町文化財調査報告第7集』久美浜町教育委員会) 1981
- (16)佐藤晃一「芦ノヤ・河ノ辺遺跡—調査の概要—」(『加悦町文化財調査概要1』加悦町教育委員会) 1982
- (17)文献13に同じ
- (18)文献13に同じ
- (19)文献8に同じ
- (20)樋口隆康「峰山桃谷古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961
- (21)増田孝彦ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査

- 概要(3)新ヶ尾古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- (22)樋口隆康「網野岡の三古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961
- (23)荒川史「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(5)「アバタ古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1988
- (24)荒川史「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(5)アバタ古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988